

資料

2016年度モンゴル国立医科科学大学訪問紀行

The Journey of the School of Nursing, Mongolian National University of Medical Sciences, in 2016

犀川由紀子, パグワ・ボヤンジャルガル, 奥津文子
関西看護医療大学 看護学部 基礎看護学

Yukiko Saikawa¹⁾, Buyanjargal Pagva¹⁾, Ayako Okutsu¹⁾

1) Kansai University of Nursing and Health Sciences, Faculty of Nursing, Fundamental Nursing

関西看護医療大学・モンゴル国立医科科学大学は「学術活動の促進と学生の勉学の機会拡大」を目的に、2014年学術協定を結んだ。その活動の一環として、2016年度は9月7日から15日までの9日間、関西看護医療大学から犀川由紀子・パグワ・ボヤンジャルガル・奥津文子の3名がモンゴル国立医科科学大学を訪問し交流を深めてきた。

以下、その活動を報告する。

1) モンゴルへ

9月7日、関西国際空港より北京乗継でウランバートルへ。飛行機から眺めるモンゴルの大地の広さは圧巻だった。ジンギスハン空港では、去年関西看護医療大学を来訪し親交を深めた懐かしい顔ぶれ、モンゴル国立医科科学大学のソロンゴ先生・ダワホ先生・エンフジャルガル先生・トヤ先生・シツケ先生より出迎えを受けた。さっそく車に分乗し、大学側が用意してくださった清潔で快適な宿舎へ。翌日からの交流に胸を弾ませながら眠りについた。



写真1 モンゴル国立医科科学大学前にて

2) 医科学大学・第三国立病院への表敬訪問および見学

翌朝、早々にナランバートル学長にお目にかかった。2017年にオープン予定の大学付属病院の建設が進んでいるが、その病院で働く精鋭の看護師が150名必要で、その養成が進んでいないとモンゴルの看護事情についての説明を受けた。日本からJICAの協力隊員等支援が入っているが、それでも間に合わない状況で、関西看護医療大学も支援してほしいとのことであった。



写真2 モンゴル国立医科科学大学 看護学校
ナランバートル学長と一緒に

その後、大学のすぐ隣にある第三国立病院を見学した。ウランバートルにおいて心疾患及び脳血管疾患治療の中心的役割を果たしている450床の病院である。

病院に入ってまず驚いたのは、階段一段一段の高さがまちまちで、昇降に危険を感じたことだった。また、廊下にも段差が多くあり、リスクマネジメントの観点から非常に危険であると感じた。そんな病院の廊下は大阪の御堂筋のような混雑ぶりで、行き交うのは患者、付添い、面会の家族の方々多数。しかし慣習の違いか身体能力の違いか、階段の高さの違いや段差に戸惑っているのは同行した日本人だけで、モンゴルの人々はまったく動じることなく平気で移動していた。

ICU・CCUを見学させていただいた。最新のベッド、モニター類、バイオハザードマークがきちんとついた医療廃棄物のケース等々目覚ましい進歩を遂げていると、6年前にも見学したことのある上ヶ原病院看護部長：島末さんは何度も驚きの声を上げていた。

その後群馬大学で教育を受けたというバトギリル院長と昼食をいただきながら会談を行った。バトギリル院長は日本の理学療法士養成制度を導入し、モンゴルに理学療法士という専門職を確立させた立役者である。流暢な日本語で、「モンゴルでは看護師という職業に対する認識が低く、あくまで医師の手伝いでしかない。社会的地位も低く看護師を志望する若者も少ない。しかし医師に言われたまま、指示されたことのみを実行するのが「看護」ではない。患者に寄り添い、心で援助する姿勢も大切である。日本の看護の良い面を学びモンゴルの看護が成長して欲しい。看護の素晴らしさをモンゴルのナースに伝えて欲しい。」と言われた。

3) 医科学大学での講義

9日・10日・11日の3日間にわたって、約300名の看護教員・看護部長・看護師、および400名の看護学生・PT・OT・薬学部の学生を集め、講義を行った。

奥津が「看護診断」「体位と移動」、犀川が「医療施設におけるリスクマネジメント」「臨地実習におけるリスクマネジメント」について講義

をした。1日目は通訳を担当して下さったトヤ先生（日本語教師）との打ち合わせが不十分で、受講生がざわつくなど内容が十分伝わったか不安を残す結果だった。通訳が本学：ボヤンジャルガルに変わると、受講生の表情が明らかに変化した。2日目からは、受講生も積極的に授業に参加し質問も飛び出し、活気溢れる講習会となった。

モンゴルのナース達のリスクマネジメントへの関心は高かった。病院では新しい医療機器が、世界の国々から無償提供されている。しかしそれらの使用方法についてのモンゴル語での説明書がないため、ナース達は不安を感じていた。使用方法を周知できていない点について、ナースから問題点があがった。新しい機器やシステムを導入した後の教育の大切さについて、また、人が医療機器にふりまわされることなくそれらを管理し、使用できるよう安全教育を広げることで Patient Safety が守れることについて、ディスカッションした。

モンゴルの臨床看護師は新しいシステム、例えば日本で使用されている注射器・針が不要かつ薬剤のミキシングが容易な輸液ボトル、針刺し事故防止対策が取られている留置針や翼状針などに大変興味を持ち、様々な質問があがった。しかし、新しい物・システムを入れることで新たな問題も発生する場合もあることを説明し、やはり教育と実践のくり返しの中からセイフティーマネジメントを目指していく必要があると伝えた。

看護診断の講義では、「モンゴルでは看護診断が導入されていない」という前提でアプローチを開始した。ところが、看護基礎教育の中で「看護診断」はもう既に学習しているということだった。しかし学習しているといっても臨床の現場で活用する状況には至っていないとのことで、日本の活用状況に対する質問が寄せられた。日本では電子カルテを導入している病院が大半であるため、共通用語として看護診断の使用が必要不可欠になっている点や、看護診断に対する治療技術の開発が遅れているため、臨床での活用には課題が多い現状について、説明した。

最終日の学生対象の講義では、通路にも座りきれない学生が出るほどの状況だった。学生は熱心で活発に意見を出し、非常に積極的だった。教科

書がないため、ノートに手書きでまとめている姿が印象的で、大切なところを聞き取り判断する能力やノートにまとめる力がつくのではないかと感じた。日本の教育の中では、常にテキストや資料など必要なものが手元にあるため、見て、聞いてメモをしたり、何が重要なポイントか考えたりする力を引き出せていないのではないかと反省した。考える力、その場で判断する力も日頃から養う必要があると、モンゴルの学生たちを見て感じた。

本学の教員3人でトランスファーのデモンストレーションを行った。前額部を指一本で押さえ体重移動を封じ込めると、立ち上がれなくなってしまふというパフォーマンスに多くの学生が興味を示し、何人も学生が「自分もやってみたい」と壇上に上がってくれた。

3日間の講義を通して、看護学生・臨床ナースのどちらも「どのようにケアするか」という看護実践に強い興味を示し、積極的に学ぼうとしていた。しかしその一方で、「なぜそのようにするのか」「そのように考えたのはなぜか」といった思考過程に対する興味が低いように感じられ、モンゴルの看護における課題を垣間見た思いだった。



写真3 モンゴル国立医科科学大学 看護学校での講義場面1



写真4 看護学校での講義場面2



写真5 看護学校での講義場面3



写真6 看護学校の先生方と一緒に

4) 遊牧民生活の体験：テレルジキャンプへ

モンゴル最後の2日間は、医科科学大学の先生方と共に、遊牧民生活が体験できるテレルジキャンプですごした。

夕食には、ポヤンジャルガルの長兄が羊を一頭使い、モンゴルの伝統的な料理「ホルホグ」をご馳走してくださいました。「スーテーツアイ（塩味のミルクティー）」にも挑戦。モンゴルの母たちは、朝、子供達の無事と自然への感謝を込めて、窓から自然の神々に向けてスーテーツアイを撒くのだそう。心温まる風習である。

天気はあいにくの曇りで、モンゴル自慢のブルスカイは見えなかった。しかし雲の毛布が地球を覆ってくれているのでさほど冷え込みは感じずに過ごし、夜遅くまで、看護教育について、臨床現場の問題について、ディスカッションが続いた。医科科学大学の先生方の研究課題は大変興味深く、加えてモンゴルのナースは数が少ないためナース同士がとても親密で、研究協力が得られやすいと、うらやましい事情を知ることができた。

あっという間にモンゴルの夜が更け、ウトウトしたころ、4時半に叩き起こされ夜空を見上げた。

夜空に白くはっきり流れる天の川、砂をまいたように広がる満天の星。光源が全くないため、暗い空に星が光り輝く。淡路島の夜空だって負けないくらい美しい…と心の中でつぶやきながらも、夜、寒さもそして言葉さえ忘れ、星空を見上げた私達だった。



写真7 テレルジキャンプ



写真8 宿泊ゲル



写真9 草原の紅葉

5) 帰国の途

14日、8日間のハードなスケジュールを終え疲労感と別れの寂しさを抱きながら、チンギスハン空港へ移動した。しかし定刻になっても、チェックインのアナウンスがなく、問い合わせると、折り返し運行する予定のChina Airlines 北京発の飛行機が飛んできていないとのこと。北京での乗り継ぎが間に合わないため今日中に帰国は無理ということが判明し、急ぎ大学に連絡を入れた。何とかならないのか、様々交渉してみたが、北京に行ってから交渉せよとのことで話の進展は無く、結局、帰国できたのは15日であった。

帰路トラブルはあったものの、モンゴル国立医科科学大学の教員と親睦を深め、新たな知見に触れる機会をいただきました事を、心より感謝いたします。